



刀筆青紙石文
四

~ 13
3573
4



門 へ 13
號 3573
卷 4



白石文鷹水箴語卷之三

江隱

曲亭

洛客

櫟亭



第五套

悠参の衣手

夏虫の封翰

あはれ筑紫の留守の宿小阿磔へ匙と只二人慰めうけて日を送るも此間の
事ながら候とやわれは久々の天河原は船よもく。水漏さりと契ららん星の
枕中羨とぬる秋の初風と予立て露けた窓の女郎花ひさしく寝まば
目睡ぬ曉ういと冷やう身ふましくと過去をさひつげてけとくらし。
翌と明せば七月も既十日ふよりけり。けの観世音菩薩の悠参と唱へ

つらや

早稲田 大學 図書館
34.6.3 雙
藏 書

する鴻許の癖者もいづこの日由参詣の女子を觀んとて、かの部屋を尻巾
 ちりぬぐ。片影涼くある比より。觀音堂を陟つ降つ漫々徘徊を程よ。
 阿磔が風俗武家ある處又町ある處素人くとんまばよろづ花奢ある藝子
 款とあひし。眉を剃らう。縹致十二分の趣あるは魂浮と心惑ふ。けいの
 小町の是あり。とまのびちちと稱つ。なほよとんとて近つ程は阿磔が
 後方は立繞る匙も亦餘念あり。繪額を瞻仰る折るれば横へ抱ける
 日傘の柄もさへも偽二郎が右の袂へ突入し。横ざまに拂ひく未時ハ
 既又過る。單衣の袖三四寸をさざんと別裂し。匙ハ吐嗟とこころよ。
 驚忙る顔すら赧めて。逡巡せざる程は阿磔ハちみえうへて。噫浅す

や。と窺つ。さへも偽二郎と。をめて面と對せ。さへも魚と。さうら由措れど。
 いと細やある腰を折め。いと素やある掌を搦て。偽二郎さうら對ひ群集よ
 推されてこの婢兒が。さうら心と侍り。許さるさうら勸解る声さうらも
 亦清爽るん。偽二郎ハ夜飼の鼓。初音を聞得し。驚とらる。妙を
 さうらもん。果敢る。怨念のやまて。あハ物怪の幸ひ。謀と試と。意中
 計較いと腹立さる。面色くと。忽地は声さうら立ある。無斬や。縦婦女子も。バ
 とて人の衣を別裂て。賠話るのさあて誰と許さん。さうらへ来ませと。教團
 つ。匙は拿せ。青傘と。豪奪て肩さうら被先よ立。御堂を下さる。
 既ハ阿磔主従ハ貨を取らして。已と。死びど。頻る宵さうら騒げども。

是謬て
偽二郎衣を
やぶゆ



佐野源左衛門
藤原常世敬告

偽二郎



大願成就
頼主 某氏女

その人の面魂悪棍あつてさるべし。色白く、鼻青く、眼細く、鼻隆く。
齒ハ壺蘆の核の如く。唇ハ紅花の含るゝ似たり。年歳ハ三十を越さるべく。
瘦骨ホシて美男子之心も貌の如くあつて、あつて崇るゝの如く。再び勸解を
せしむつ。その後、跟てゆくは方丈の西のかまは建仁寺垣を取付けて引入たる。
禰廬あり。そこまの人の部屋あり。片折戸を推ひ、阿彌主徒を誘引する。
身怕して進歩を主徒竹縁の手を付けて。復只管は勸解するふらん。傳二郎
氣色を柔げく。否とも腹、ろろのあつて、ねを勸解せんとして、らあ、婦人か
引とを侍らんや聊頼ともなや。とあつて侍まも。衆人聚ふ本堂に。その由
便りもいふれば、どうも誘引立て来つ。要時ありとも婦人を苦いめいと

恥しれ、部屋に入せまのまふこそ。そればかり馴々々。名告う、面
るあれども告ぐ誰とをゆん。もの草樂傳二郎といふの、掛津國
ある天王寺の樂人の子れども。や二親を喪ひつ。所帯を叔父は横領
せられて愁訴の爲上京せられど宿望いも。時至る當院の方丈へ俗縁の
いへ、且く寄宿する。所帯を横領せられても怨を忍ぶ。某が草衣の袖一隻
破らんとて何とあつて。況月雪花も優る君の賸話。そのよとあつて。
身を八層は裂き、ても堪忍ぶべし。それれども。いふせん。この衣ハ亡母の織て
り。せ。像見とてへ惜う。とや破を綴ても断離果るまふ。とあつても。
寺内よれへ縫刺よ。その人あつて不便。あつてこの草衣を、宿所へ

青磁石文巻三

けりて綴補ひのつづ。まよまよと幸ひみし抑おん身の宿所ハ何れぞ何氏の
 殿の奥まよまよとて一まんやんと問ふ辨舌ゆいと爽すお妻なる水と已が田へ
 引とりのぞ悟るべき阿磔ハ宵を搔拵てをぬぐと息とつたりのなる
 辛らめやあつんと安さ心ゆみくいは然らけり侍りぬる妻こそ幸ひ
 られ匙を生くる心地ぞせん今新し衣をぬぐその衣の代も進みし
 勸解るとも亡母君の像見るる許さるるへもあは衣ぬる夏ハ掛けた
 宣ふまよまよかへつて今宵の中は縫綴り翌ハ早速この婢見しと還し
 ちのつとべふるん妻ハ富小路あり名草劇齋とぞうり有繫は恥く
 口隠しハ偽二郎聞てうち点頭原末名草ぬとやらんの令政よとてさう飲

さへおん身の玉手と借んハいと憚るるこそおん供ある女中おてもとつれて
 匙ハ塵搔拵り否妻ハ舊足袋欣雜巾もふ刺ゆせん衣の被縫ハいと
 多く侍りし頃日ハ主の殿の旅宿の苗守は侍りか入もそれも徒然なる
 侍は妙手よとてさればといふと阿磔ハ尻目よかけりうち咳まら紛せむ
 偽二郎竊は飲びく障子の蔭へ退き別の單衣は脱ぎえて破くこころ
 ちのめの衣を畳きて端近くりて出て然らば頼奉るいと憚らぬといひ
 袂は推包とてそが俵匙は通とせし阿磔ハ要時沈吟し細小なれ
 鏡を附る金襴の鼻紙夾と懐よりさう出上り偽二郎かやをにさよせ
 宿所を知し侍りてもよ下めての見参し二る衣を預りてその代は影護し

折々途中のみぢれば相恋の物もなほも彼衣を縫綴りて返りまゐる
 とき時よめてと留めさせぬく。と他事多き人の當座の質種心を用ひ
 伶俐なる偽二郎の且感且泣びて推も返さずと舊衣ひきの故をりく。
 いも愛した鼻紙夾と留むるのさあねど君が御膚は觸りし力のこ
 懇切は宣ひしを推辞は還りて無礼なる人作ら休る為とあつたか
 恋つ取て机は置よりかくて阿磔の別を告て歸去とを叱といそかせ祇
 色とられた抱さ又青傘を肩おして後方は跟て立出る庭は合歡の逢開
 眺果敢あけ散る花を禁めし移つ偽二郎の恋も恨む入相の鐘いと
 と申と目送りけり。扱も今偽二郎が云々と阿磔はさうへを告するの皆

是根々一言ありぬ渠の東國の人氏ふして放蕩無頼あるふより。親族は
 疎果ら且遂は故郷を亡命して年来京棋の間は浮浪と一所不住の
 りのあざありたる。とて手迹へ人よ勝きて且小文才あり。その性浮薄便安
 られば俗子の為は朝榜せられてもかくも口を鯛へり。かくて又らぬ比と。蓮華院は
 傭まきと蠹蝕する経巻を繕寫あどつ。方丈は寓居とると既二三ヶ月は
 及べり初偽二郎が蓮華院に未つ時當寺の觀世音菩薩の感念利益
 灼然とと豫より人よまひへば。かく久後の吉凶悔吝を問奉らば。とまひ
 つ。有日本堂は登進て。さうら靈籤を拈ひし既して第三籤と
 たり。その識よ云。

書碁石卷三

蔽衣又莫綴 深著欲相縁 臨水不可濯 遣磁初

究研。かゝ靈籤を得れば、いづれにそのまをいふと、後々

す。佛陀と信するもの、なげ、敢又懸念せむ。そのまを忘れる、間話

休題、さる程は、偽二郎ハ只顧阿禪ハ懸想して、さよ、かろ、さよ、みやう。

嚮ハ彼美婦人ガ、宿所ハ富小路多。名草劇齋との、告て妻の字を、

か、神ハ必その側室多るべし。これいぬ、比この寺の諸檀の姓名簿を、開早ハ

件の名草ハ醫師ふて、さる、新々ハ檀越ハ又そのあつ、ハ旅ハ在り。

徒然ありと口過り。下女ハ是氷人、既より、謀る所意外ハ出て、造化

絶妙、と、懐ハ入る、似、え、ハ本意と、遂、さる、や、ハ、彼、下、女、翌、ハ、必、未

べ。先渠とて、らへて、媒鳥よせ、ハ、緯成ら、と、や、せ、や、か、や、せ、や、し、と

竊ハ肺肝と推さる、遠く、街坊ハ出て、準備の東西を、買さる、その、宵

燈下ハ毫を、漆て、艶翰を、写め、堅く、封じて、曩ハ、阿禪ガ、遣、留、鼻紙

夾の間ハ、刺入、と、支度、既ハ、整ひ、け、ハ、幗、釣、垂て、臥、され、も、いと、樂、して

い、も、寝、られ、れ、ど、勿、心、地、ハ、又、と、ふ、や、い、ぬ、比、これ、ハ、の、寺、ハ、未、つ、時、觀、音、籤、を

拈、ひ、り、第、三、籤、を、ひ、く、る、あり、何、と、い、ひ、と、目、を、開、て、稍、ハ、出、たり、

蔽衣、又、綴、ると、莫、と、漆、著、し、て、相、縁、人、と、欲、を、と、ハ、よ、舊、る、衣、を、綴、る、ハ

成、難、く、蔽、易、し、ハ、い、いと、難、き、情、癡、ハ、喻、て、綴、る、と、い、ふ、と、い、ハ、款、を、い、ふ、也、

漆、著、し、て、相、縁、人、と、欲、を、と、い、ふ、と、い、ハ、彼、ハ、色、ハ、漆、り、彼、ハ、情、ハ、漆、ら、ん

その天縁ありぬ飲水に臨て濯ぐべからば砥に遇り初て究研と云
深きに遂に濃き中の水漏りと契りつ。磨く送の眞實情に砥より堅
しといふゆ欵かれは是假深の恋ありぬ因り縁あり亦何ぞ疑ん
憑しやと身勝手よ菩薩と誣る凡夫の判断生才学ぞ鴻許りけ。案下
某生再説阿磔はその日途とらふ匙をきく歳めと遠く宿所へ還ま
異社の中へ待つに。松木挽坊へ退りたるかゝ阿磔はその夜も偽二郎
衣と綴り針目の拙さぬ笑ま下と云へ更闌るまで苦心してその破と補ひら
彼人のるけ人のる匙共侶よ噂く人の噂を想像る夕涼に秋風小浮動る
萌葱の蚊屋の裾揚る寝よ就まけりかゝ又その次の日の午過り阿磔は

小杉原世帖と沈香二両許累を乞。匙は口状云々と叮嚀に分けて彼草衣と
共。齋と偽二郎許遣しけり。かゝ程に偽二郎ハ阿磔が音耗せしめて
ゆふくと俟程よ未も既よ下る刺折戸より呼門せり。その人の下女来よ
けは遠く出迎へるよよくこそ来よと云れ且こゝへと母屋へ請く
管待大さるるがんば匙へ額に汗を流して。ややくは膝を進め阿磔の
わらひはけられし。その人の不慮のりよ。御秘藏の衣は傷けし
海より廣き海を泳りて速に許さるひん。かゝる幸いとこそ飲ひ
侍れ就てそのおん草衣を徴補ひ侍りし。拙さ手少のりよ。裂衣
目と隠すべくも侍らば。此の爲に稱ども。収めさせり。又その二種ハ

珍^{めづ}ら^う侍^えども有^ありつ^つ。隨^まは^らん笑^{わら}ひは備^{そな}侍^たべ^り。受^うせ^せむ^らひ
 い^いろ^ろり^り飲^のみ^まし^まし^まし^ま。と^とや^やら^らし^して^て侍^えり^り。と^と述^のべ^べつ^つ件^あを^を連^つれ^れ偽^{いつ}郎^{らう}ハ
 日^ひが^が衣^えと^と件^{けん}の^の二^に種^{しゆ}を^を額^{ひら}に^に當^あて^て念^{ねん}を^を如^{ごと}く^くう^うら^ら捧^ひ拜^がす。と^とい^いひ^ひけ^けあ^あ家^い方^か自^じの^の
 玉^{たま}手^てを^を受^うけ^けの^のま^まち^ちに^に。この^{この}件^{けん}を^を入^いり^り賜^{たま}ひ^ひ。千^{せん}金^{ごん}を^を手^てに^に福^{ふく}ひ^ひ。彼^{かれ}も^も此^これ^れを^を
 ち^ちん^ん身^みが^が執^{しやく}成^{じやく}の^のひ^ひも^もあ^あま^まぞ^ぞあ^あん^ん今^{いま}ち^ちん^ん答^{こた}を^を入^いり^り。安^{やす}坐^ざて^て汗^{あせ}と^と納^な
 め^めん^んと^とど^どく^く寺^{てら}内^{うち}の^の寓^ぐ居^{きよ}何^{なに}事^{こと}も^も隨^ま意^いの^のま^まに^に。東^{とう}道^{だう}熊^{くま}の^の疎^そま^まよ^よ
 め^めん^ん要^える^るれ^れ東^{とう}西^{せい}の^のれ^れも^も。ち^ちん^ん使^{つか}を^を勞^{らう}ふ^ふま^まで^では^は進^{しん}む^むと^とい^いひ^ひか^かけ^け
 銀^{ぎん}の^の釵^し兒^には^は富^ふ士^し雪^{ゆき}と^と銘^{めい}打^{うち}る^る白^{しろ}粉^{こな}は^は小^こ町^{まち}燕^{えん}脂^し緋^ひ絞^{しやく}の^の鬘^ま結^{むす}を^をシ^しど^ど
 三^{さん}四^し種^{しゆ}の^の具^ぐひ^ひ。括^{くわ}り^り俵^{たわ}の^の緋^ひ纒^{せん}の^の縷^る半^{はん}の^の袖^{そで}は^はあ^ある^るべ^べき^き程^{ほど}二^に包^{たう}ふ^ふと^と取^と
 り^り。

それ^{それ}は^は匙^しハ^ハ披^ひき^きま^まし^して^てん^んの^の世^よ糸^{いと}と^と日^ひ来^きよ^よの^のと^と欲^ほし^しと^と入^いり^り件^{けん}々^々なり^りけ^けん^ん
 頗^さら^ら胸^{むね}の^のま^まら^ら騒^{さわ}ぎ^ぎ。受^うて^てよ^よら^らち^ちら^らあ^あま^まさ^さ。辞^{こと}ハ^ハあ^あて^てま^まら^ら戴^{たい}さ^さ且^{かつ}く^く
 納^なり^り糸^{いと}と^と偽^{いつ}郎^{らう}ハ^ハん^んと^とち^ちら^ら微^あ笑^えす。と^とい^いひ^ひの^の東^{とう}西^{せい}何^{なに}の^のあ^あん^んと^と受^う
 納^なめ^めあ^あひ^ひて^てよ。ち^ちん^ん身^みは^は問^{もん}を^を得^とり^りたる^るあり。彼^{かれ}君^{きみ}ハ^ハ名^な草^{くさ}ぬ^ぬの^の令^{れい}政^{せい}は^はす^すま^まと^と飲^の
 め^めん^ん又^{また}何^{なに}の^の故^{ゆゑ}。頃^{ころ}日^ひ旅^{りょ}行^{ぎやう}と^とま^まの^のや^やん^んと^と問^{もん}ま^まし^し匙^しハ^ハ隠^{かく}す^す由^{よし}を^を
 主^{しゆ}人^{にん}劇^{げき}齋^{さい}ハ^ハ筑^{ちく}紫^しの^の探^{たん}題^{だい}の^の微^あま^まと^と西^{せい}國^{こく}へ^へ赴^{しゆ}き^き。阿^あ磔^{たつ}が^がう^うへ^へ云^いふ^ふと^と
 婦^ふ女^{にょ}の^のま^まと^とく^く苗^な守^{しゆ}と^とい^いふ^ふ遺^い物^{ぶつ}を^を告^つぐ^ぐ。偽^{いつ}郎^{らう}ハ^ハん^んと^とも^も膝^{ひざ}を^を進^{しん}め^め
 耳^{みみ}と^と側^{わき}満^{まん}面^{めん}は^は笑^{わら}と^と合^あて^て聞^き果^はて^て額^{ひら}を^を拵^{しゆく}原^{げん}来^きの^の秋^{あき}の^の夜^よと^とい^いふ^ふ。と^と徒^た然^{ぜん}と^と
 云^いふ^ふと^と。某^{その}近^{ちか}日^ひは^は推^{おし}参^{さん}す。と^とい^いふ^ふ賜^{たま}ひ^ひの^の飲^のび^びを^を入^いり^り。と^とい^いふ^ふち^ちん^ん身^みま^まら^ら還^{かへ}り^り

彼人が懐紙を巻籠てから物を贈りて。さればと。ゆゑの身をりて。
 回報とて。さうのあつた。翌又彼れに赴き。この艶簡を返して。さうして。
 北へ来た。目と圓く。太息と。今さうか。へ彼人の物いひ。さうの
 懇ろり。へこの底意。あつた。さうの筆の回答。せ。この艶簡を返して。さうの。
 渠飲び。納人や。怒。値。り。さうの。や。さうの。拳。さうの。衝。さうの。数。さうの。
 尚家公の名。と。さうの。さうの。外聞。さうの。けん。この。使。免。さうの。彼人。さうの。
 推参。て。云。と。い。ひ。つ。且。バ。訪。未。ぬ。日。と。さうの。返。さうの。も。遅。さうの。あ。ら。ど。さうの。
 さうの。や。と。真。と。さうの。推。辞。バ。阿。祿。の。頭。を。傾。り。さうの。も。理。と。さうの。さうの。へ。
 彼人。さうの。東。西。あ。つた。の。使。立。か。さうの。この。艶。書。且。く。留。め。さうの。も。

回報とせ。何の。人。毛。を。吹。て。疵。と。求。ん。と。さうの。諫。は。従。へ。ん。努。秘。の。へ。と。
 密。語。つ。復。紙。夾。を。納。め。て。心。よ。か。さ。が。浅。と。さうの。又。つ。と。さうの。さうの。彼。人。
 貌。の。さ。う。才。長。て。け。あ。く。さ。う。の。謀。と。さうの。さうの。紙。書。た。り。ん。封。箴。を。
 破。ら。ぬ。竊。見。か。や。と。不。覚。と。さうの。さうの。さうの。艶。簡。と。さうの。出。く。
 さうの。唾。と。り。て。潤。つ。徐。々。と。披。き。て。閱。む。劇。齋。が。賽。唐。様。の。釘。の。
 折。れ。似。る。べ。く。も。あ。つた。走。筆。の。愛。と。尾。花。が。袖。と。招。き。負。は。何。の。あ。り。
 たる。文章。よ。あ。の。も。嘆。賞。して。繰。返。し。又。さうの。返。し。巻。納。め。ん。と。さうの。折。
 かる。秋。の。夜。風。の。颯。と。吹。入。ま。す。件。の。艶。簡。の。封。皮。を。閃。々。と。飛。せ。さうの。へ。
 何。と。り。近。き。蚊。遣。火。へ。投。る。か。如。く。吹。入。ま。す。燧。と。燃。立。程。も。さうの。灰。も。



とめどありにたり。阿磔あはせのかゝ形勢かたちよ。六むいつふせんおどろと驚忙おどろて追おんとする小竟こけいは
及および悔くしめる然しかりてたり。と身みと恨うらみとも術まへを。封皮ふうひを失うはてし返かへりとも
受うけとれしやとよみんかぐせん。とひつら困こ下果げつ由よしも早はやして又またあやうかあつめよ
恋こむ癖くせ者は返かへりて何なにとてとへ。留置りゅうぢ入い影護えいご。とひつらつ件けんの
艶えん簡かんと蚊遣もんぢ火鉢ひはち投入いれり。その緯ゐの為ため体潔ていけつきよ似にた心こころもなほ迷まよひ初はじめ
ころよからざるにあらねば又またあかよ思おもはせ。俟まちとみよ日を送おくりぬ。

第六套

除雷とらの垂た樹じゆ

山鷄やまどりの水鏡みづかみ

ころ程ほど又また草樂くさらく傳つた二郎にらうハ曩なも匙しを還かへせり。既すなは四五日四五にちを歴へれども彼
下女げぢよ再び来るくるを。原来もとも艶簡えんかん恙あやなく。彼君かのきみハ納なめりん。今いまハこれ比くらある

べ。こゑへばその朝あより沐浴みよくよ心こころを用もちひて。衣裳いさうも暗くらと装飾まうしす。その夕ゆふれ
より寺内てらうちと出て途みちめて酒肴しゆげを買かひ。手てつゝ偏提へんていを携もつて富小路とみこうぢよ
赴おもむき人ひとを問とひて彼此たがひと。その宿所しゆくじよを索もとふ。衡門へいもんハ標牌ひょうはいを打うて名草劇なぐさげく齋さいと
写うつしたまは。とありけり。とて海うみは点頭てんとう外面うへめんより窺うかがふ程ほどは匙しハ門かどを鎖とんと。折ま
とくも外と又また出でつ。と喜果きこぬ星明せうめいは送おくは面おもてとあへり。偽いつはり二郎にらう荒然あつらと打笑うちわらて
こゝ阿あ是こゝとの恙あやなれや。主人かみハいもど還かへる。彼君かのきみひとりや。ゆゑ前日まじつの
久ひさ直心ちよくしんの謝あやまり。と人ひと為なる偽いつはり二郎にらうが。と傳つたへた。と密語ひそかごとハ匙しと
小腰ここしを折まめつ。とよとて。忘わすれも果はど忙いそしく内うちよ入いりて。云いふと告つぐる。小こあ
阿磔あはせハ胸むねまづら騷さわぎ。速すみに避さけん所ところを知しる。かゝりて返かへりて。答こたへて

ようらん奴と云ひ子回答か様て。匙と引つけ置程は偽二郎を千くその
 氣と察して呼門ゆせと進み入る。既次の間を未よけは阿磔へ遂に
 避る由あり。軈て出て對面と當下偽二郎へ寒暖を述安否を訊扱ひ
 せり。是裏不憶るふより。玉手と勞せのともいふ。よるは種々を賜
 下。おん心標の黍を。寐ても寤ても忘らまじ。切てその謝を面よりす
 えとてかへ推まつまう下ぬ。就てこころをさうの芭苜之日美美味珍膳は
 當せぬおん口を。稱ひくくわんいと恥しく。といひつ。偏提をさよとれば
 阿磔へ恥しむ。ちのちを。ささひひもあら。さるは衣を損ひ。罪を免され
 たるよし。此の東西と進せよ。その回報をあらうと云ふ。好意のいふべし。

欺しく仕する。受をあらうと云ふ。と辞ひつ。強つ。謙退辞讓は言葉づくもあ
 げれば阿磔の困どく傍をえかへり。匙よ。かきま。推辞ても。聴たぬをいふせん。同れ
 間へ小膝を進め。推辞のふへ理るれども。酒返へせぬのといへり。ともかくも
 討ひてえ。妾は預けり。和鮮て偏提を引とく。さく。危福より退つ
 酒と湯め者と投き。軈て偽二郎を勧めけり。そのさる偽二郎を愛する
 わるぬども。前日おひかけあり。その賄賂を受れば。報ひとせんといふ。い
 わる。阿磔も今へ己と云ふ。と盃を奉て偽二郎を款待程は下戸あり。ぬこそ
 身のゆゑ。巡る盃のかどく。客も主も微酔する。偽二郎ハ衣して落語は
 笑ひと催し。或ハ浮世の物語。恋せし人の噂さへ。身の懺悔よりなりつ。

奥に乘りて又りや。率亦あるのみ。六七年よりや。ぬ某流浪
 ある時。鎌倉ある友と索ねて。彼地へ赴き。その人へ去歳のその
 月。身やうやぬと。進退其れは谷りて。いつふもせんを。その日の
 既。暮らる。獨行と。宿賃ね。己と。鐵の觀音堂。曉を待
 一。時の丑三。わりのけん。と。男と女と。忙々走り。来つ。草折布て。
 坐と。台て。俣。死ん。と。折。追。来。つ。人。夥。棒。と。閃。と。撃。ん。と。
 男。女。と。後。方。は。推。遣。り。又。と。振。り。逆。戦。大。刀。風。は。堪。じ。や。わ。り。けん。
 幾。と。崩。と。逃。走。と。何。れ。と。追。蒐。と。當。下。女。ハ。驚。き。忙。て。觀。音
 堂。は。隠。え。と。て。欬。扉。と。開。ん。と。と。打。て。斜。る。故。引。と。く。速。の

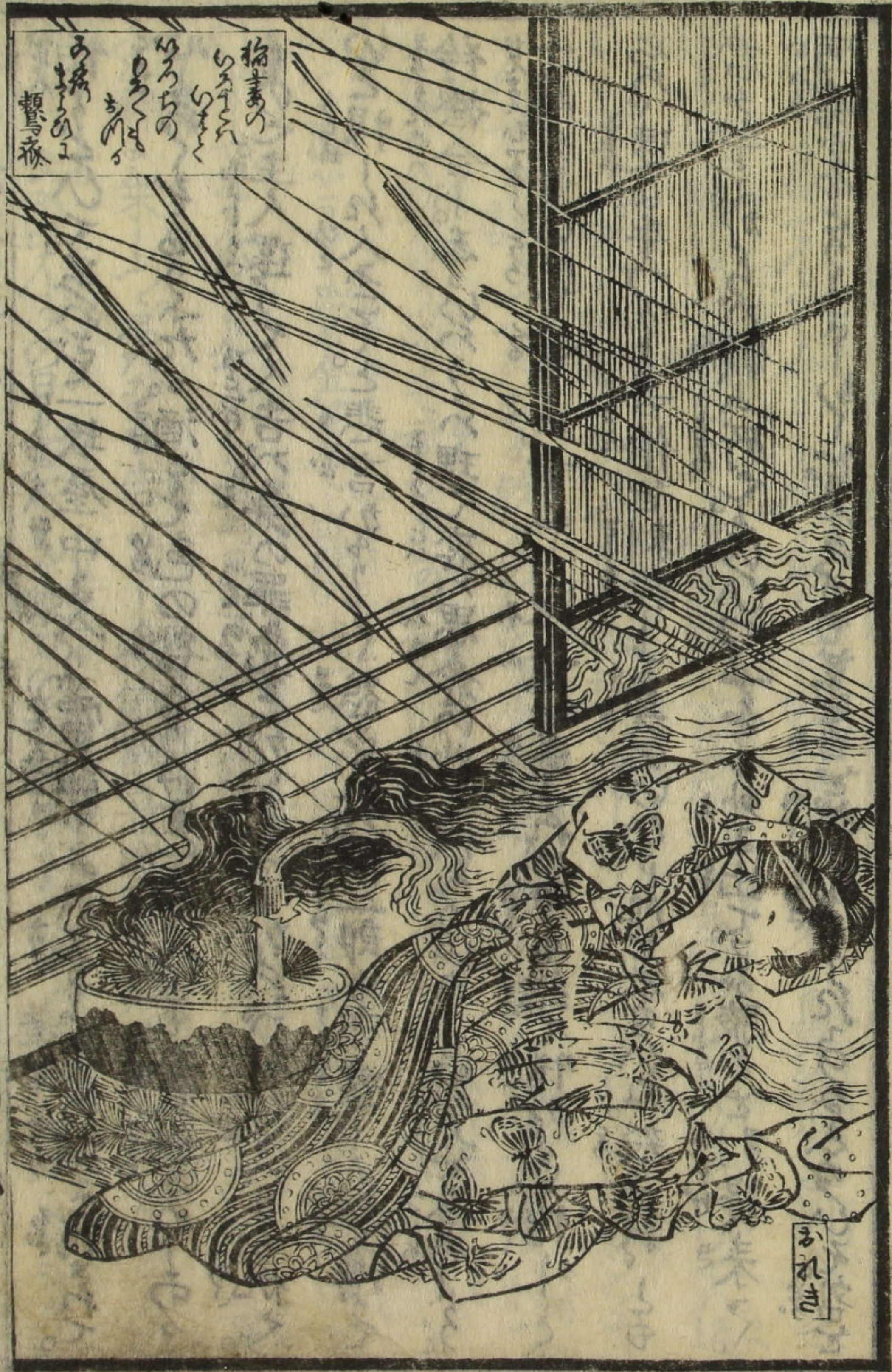
開。某。初。より。月光。は。關。窺。つ。いと。痛。く。又。は。扶。く。と。予。く
 隠。え。と。て。裡。面。より。扉。と。推。開。つ。搔。抱。て。引。入。り。小。女。ハ。い。づ。る。意。を
 以。ん。苦。と。叫。び。と。逃。ん。と。と。又。抱。留。り。几。丈。の。か。ま。と。と。手。が
 障。り。足。も。障。り。て。理。あ。も。結。び。捨。る。假。寐。の。夢。の。解。て。果。敢。か。れ
 雪。の。下。顔。も。認。め。ど。名。告。ゆ。せ。ど。別。と。迹。は。遺。る。釵。兒。月。は。翳。り。て
 熟。視。と。ハ。銀。不。り。て。絳。彫。あり。渦。水。の。紋。と。影。と。遺。憾。は。魂。焦。と。く。
 迹。を。慕。り。て。邁。程。は。蕉。火。駭。ゆ。照。り。て。再。び。追。隊。い。て。来。り。喧。嘩。の
 側。杖。打。と。下。と。横。ら。道。は。迹。も。由。苗。と。と。や。曉。の。天。牙。で。降。る。霜。月。の
 草。枕。旅。の。あ。は。風。聞。と。聞。定。る。と。も。は。躬。て。浪。花。は。赴。け。不。彼

女のいふよりけん。と痛くこそと。阿磔の頼は手を加てつくと。嗟嘆
 くら。よ。男をう。浮氣あるのわより。人々も亦俱は死んで走り
 郎と棄て誰か靡くべき。名は天原の雜混寐。神の結せぬといへど。阿牙の
 ぶれはあまの情。只是浮氣はゆるむ。といひて。偽二郎頭を拊然。下
 宣へば。浮氣ともいつるべし。且ど某が本心。原彼女を堂内へ隠さんと。かひ
 起す。かれば。是浮氣に似て。慈悲真實はゆるむ。情郎のありと知りつ。
 杖にと。いひ。のど。況某がその密支る。逃足遅鈍追逼られ。何ぞ
 女と苦む。いふ。おぼさげや。といひ。阿磔は有理と。點頭の。側聞
 匙ひとり。堪むと吐と笑ひけり。かく。奥に。酒も。醋も。今暮ぬと。かひ

一。小夜に二更より。南の窓より。月影も。野干玉の烏夜と。あるまじ。いつの
 程。欽天結陰。夜雨頻に降る。雷も大く鳴出。阿磔は忽地
 奥に。や。名。匙。雷の鳴るを。いふ。そ。憚を。棄て。と。急ぐ
 程。よ。母。鳴渡る。雷電暴雨。匙は。怖る。氣色も。唯と。応て。身を。起し。
 次の間。臥草布。と。て。憚り。揚て。立駈け。偽二郎。似げ。あ。も。怕ま。そ
 耳。手。を。放。某。ハ。性。と。て。雷。鳴。を。甚。嫌。へ。笑。も。堪。が。許。を
 ぬ。と。む。く。驚。ま。立。て。次。の。間。ま。ご。無。果。ぬ。憚。を。褰。て。閉。り。と。入。り。そ
 俯。り。も。匙。ハ。こ。ま。目。由。か。げ。ど。後。方。を。信。と。ん。か。り。て。噫。鈍。や。
 接。り。よ。け。り。仰。窓。も。ま。閉。む。矮。樓。の。兩。戸。も。闔。ざ。り。ぬ。と。い。ひ。さ。ぞ。ぞ。

厨のかへ走去りつ。る月鳴渡る大声發動阿磔ハ顔の色変るまで。
 素より怖る雷鳴よ今も和憚を筆するも偽二郎は先とせらるるまで。
 一所又入るんはまんまう。齒戦ふる普門品の除雷の偈と唱る程よ。
 晃き走る電光は障子杉戸由響動るる。惠々と鳴るをめけハ。
 遂は忍ぶは忍ぶとて驚忙て憚の中へ逃籠るるくくびる。跟々とて
 偽二郎が何とくへ撲地と臥しけ。嗚呼是怎生ある天変ぞ巫山の雲
 楚臺の雨造化も亦意ある。奸夫淫婦と資る欵豈但れと天といふや。
 小人ハ媚むべく。君子ハ懼てじと捨へ。さる程よ匙ハ精悍しく立達りて。
 雨戸繰被るどさる。雷ハ後の一声のそめて。雨ハる月降けり。よりと

盃盤とどう納めて。偏提も洗い清めつ。物大りくは成果も。客もわらも一房と
 出ど雷の鳴るる。一によう。厨は存る程偽二郎ハ還るカハ一欵。
 刀自ハ熟睡まのひ一欵と心りとあひまひもいど。潜す立よりて。憚の中を
 さ一覗けハ。偽二郎ハそは。阿磔と俱臥て。振ぐる光景ハ胸騒ぎ
 膽潰れ。顔は紅葉のから散るの。驚きんはまんかあて。足をや退死つ。
 その起出ると候る。要時こそありけ。蚊ハ刺るを覚ぬをいこの
 いだるる。少女の癖まれば。更闌る隨睡は堪む。いつの程も
 假寐して。天の明るまで。ざりけり。早くと憚の中。阿磔ハやを
 身と起して。潜然とて。目皮を潤し。浅まやんま。初ハ雷鳴小



ありし幸の死中の幸ありとぞあるも。又當然難義あり。彼百金を嶋影
 屋へ返さんとするは金調へば遂に牙を大磯の花街に沈めてややく小
 親の債を贖ひつ。妓院の勤苦くも。母哀れにの程あり。年よりうら
 たり比二親ともは牙よりぬかくて湯治も次の年心乱して自殺しつ家へ
 跡を断絶せと灰は傳へ聞の籠の鳥ある妓院よれば本未巨細一
 あるより多しほど。終は怨を復せ。とむひも罪悔りかへ。是より先を
 夜より鐵觀音堂のぼりて。妾の親を助け脱して親家へ還り
 時袿を脱んとする程。夜領の間は物ありて音して落るを取ると山鶏の
 鞆にその足竊まあり。必死を究められをも挑む戯し彼男子こそいと

憎むべきものも。尚彼人より引込まれて。觀音堂に籠らば吾侪も追隊捕へ
 られて取のうへも辱事ありん。情死は後と追隊を脱して。親の家へ還り
 全く彼人の資よりなり。然ると死の再生の恩ありとせむは靡ぬ草の仇枕
 ども。過世ありてのなりぬ。且この鞆めたるもの。懐はあはさき苦みし。
 彼人吾侪を挑む時刀の鞘を突入して。おぼ遺せし物あり。又只おぼ
 のこよあり。その時お送せし飲み。釵見一條あり。何よそれの鞆と秘置はる
 人を知るとは。がやなうもやん。とむひ。紙は捨て。護身囊は納め。さ
 かくて。牙を售られ。妓院の勤。年を歴て。年限。一年あり。去歲の春
 浪花の商旅の主管。受出されて。彼地へ赴き。中宿に隠置して。處ると後

西月許その人私慾發覺て親方許逐出され妾と預け一宿は僕居と
 しく日もあるで猛時疫を身まかりつ。憑む樹下は雨漏りてせんをへるん
 身守乳守られ神崎られ浮身の宿は身をよせて再び掙ると人勸め
 二度の苦畏へいふ不好く京は一個の親類あり。妾が母の従父姉妹あり。
 名を異社と呼ぶ。今も杣木挽坊のほとりふどり。渠も初に化粧坂を腰掛
 酒を賣りつらう。うち續く趣舎はあまふ。夫は僕して都より。あかも世を
 渡る程は近属丈ハ世を逆ぬ寡居は賃刺維して細煙を立作り。刃の為
 親族あるなど妾が人と侍つ。いと憑く消息して懇に招くよ。去歲の
 秋より都より。異社許宿とつ。初冬の比媒妁せんとて。その主人の側室は

多うつ。程もある家の事。よか任用せられ。あが隨意まう。ごちて正妻小
 一も異なる。然とそ好る夫も。ねど情は深し。思も亦重まう。の小夜衣つ。まを
 累る罪科ハ過世脱とぬ業報歎。あひ絶んとあひ。とも放とも。身身の因果
 心太くも留守の宿。あふ夜の数ハ限りあり。後の別を今さ。想一像れハ形
 ろく。悲しう侍り。と密音は郎の膝はぬり。涙は癡情と頭せ。偽二郎ハつ。と
 聞くは樂しく望足りて。罪も報もい。で。あひ。ん。袖のて膝ある涙を拭ひ。
 これわん身ハ鐵の観音堂あて邂逅せ。女子と云ふ。あひ。ん。孫と。如。ハ。かられ
 蓮華院の観音堂あて眷恋し。より。寐ても寤ても忘る時。枕を推し。
 胸を苦め。如意満願の今ぞ知る。東國で結び。前縁あり。のんや。又。は。

山鷄の片靴と。おん牙が渦水の釵見と。迭代又身は著て。年へ経まども失はど。
 今再會の識とあり。一人力ある天縁あるん。おん主人はあもへる。とも
 内妾のふかあれば。そが還るの後術よくして。身の暇を請ひ。そが又退
 去るべ。おん牙則に妻ある。歎くところ。と慰めて。又彼靴と。そがあげつる
 少くもこの山鷄こそ。後の縁と結ぶの神多れ奇こと。と稱賛して。包紙
 さへも投ま。そが所もあそよく。視ま。幽小字。数字あり。惻隔は行燈は。
 さしつけて。又よく視ま。山鷄のちうらけ。ささみ。ぬる。水か
 して。と一首の歌。おん書。うける。偽二郎。まぐら。吟。して。この歌。おん牙が。詠
 たる。歌。と問。阿磔。へ。詠。げ。その紙。と。そんか。うら。妾。へ。素。より。歌。を。ゆ

よ。おん。初。この。靴。と。包。紙。の。白。紙。あり。然。る。と。自然。と。この。歌。の。見。と。う。歌。不。思
 議。の。ふ。是。商。と。この。歌。へ。筆。り。て。書。る。の。あ。る。虫。の。糞。と。ふ。の。著。て
 文字。は。あ。ま。さ。が。如。し。歌。の。さ。は。甚。麼。ある。も。ど。い。も。怪。しく。ゆ。ま。や。と。の。且。て
 偽。二。郎。驚。嘆。し。現。ま。の。文字。へ。虫。の。糞。と。い。も。歌。を。ゆ。ま。も。當。物。あり。と
 見。と。る。と。あ。る。山。鷄。の。鏡。と。い。ふ。の。魏。の。武帝。の。故。事。と。南山。と。い。ふ。処。より。山。鷄。を。献
 せ。時。その。鳴。て。且。舞。ふ。を。見。と。欲。ま。れ。も。と。ま。る。り。た。時。は。公子。蒼。と。い。ふ。の。
 鏡。と。その。籠。は。掛。で。形。を。鑑。せ。る。山。鷄。の。影。を。見。て。悲。を。舞。て。止。む。遂。に
 死。せ。と。い。ひ。傳。へ。ま。と。和。歌。へ。山。鷄。の。尾。は。鏡。う。け。と。い。ふ。ま。ま。と。ま。ま。は
 夫。ど。り。け。め。と。人。磨。へ。よ。ま。た。ま。ま。と。外。は。山。鷄。の。水。鏡。と。い。ふ。る。歌。と。い。ふ。の。ま。ま。と。

あまの歌のまゝにまゐりかかれ歌の進雄尊の八雲より出雲八重垣を権輿と
 して奇稲媛と娶りもひぬ妹使のそめもつよありのさげの包紙は初るは歌
 おのづから願まじりかんとされ夫婦はあまの祥よとていと愛とと祝は
 阿磔も亦飲びて以後憑しくあひたり嗚呼奸多かる邪ある哉於戲愚
 ろろろ迷へるうね偽二郎八鎌倉まで観音堂を撮りて盗行を悔と怕は
 再び京ある観音堂まで阿磔と眷恋て靈籤の倣歳を以悟は種々の
 奸計とめぐるて人の妻妾と竊盗又靈籤の歌とて怕はて神の
 助とて曲字暗記みぐる端は奸中々愚の甚死め天怒冥罰結局に至て
 知るべし又阿磔が淫奔ある譬は路傍の花の如し只人々を折ると栄と花又

道中の駄馬の如し人々毎日小乗とも飽と補綴者云大約傳奇小説は奸夫
 淫婦の情態を寫すは是誨淫まらるるまらるる詩は鄭衛の淫風なり聖人
 ことと削ぐり蓋戒と後世は垂るるべし尙この意を汲むるのこの編を
 見へ嘲りて宜淫導慾甚といふ又この意を汲むるのこの條と見嘲りて癡漢
 固く耳と塞て鈴と盗むが如といふ戲謔も思より出づ豈補綴乃本意
 あんや今原稿の大意は縁とぞと筆削せしめらんが聊勸懲の辞を
 添ふ只彼遊里はその子は撞見て親を殺すと戒る白物あはれをわん
 末編局と結ぶまで讀得て作者の用心を知るべし問話休題かくその話
 朝阿磔へ匙と召近づけて主人の還るるまで偽二郎ぬを潛す小苗人と

ぢやう。その内外の播とあつて。よろづふを附て。この要らぬものも。
 ちかまへといひかけて。京深の草衣と。縷子の帯を取せ。偽二郎も亦
 甘言のく。匙を賺とて。一つ。碎銀西三顆紙は。捨りて。贈りけり。匙をかく
 賄賂に困して。納難とて。母頼は。勸められて。遂は。推辞る。紙は。受けて。はて
 退きける。噫。この下女も。拘黨入りて。主の爲まにかへた。奸夫淫婦と。責る
 る。月未阿磔の匙が。母の。異社に。物を取ると。尋ら。且。さ。才の。情を
 被て。使う。その。欺。只阿磔。ある。と。知りて。劇齋。ある。と。知。た。り。ん。や
 又。その。年の。少。ま。よ。り。て。欺。易。理。義。は。怜。悧。の。の。の。縁。は。絆。の。こ。こ
 及。ぶ。あり。ま。ん。ば。い。く。程。も。事。破。ま。て。偽。二。郎。阿。磔。匙。ホ。ハ。さ。と。劇。齋。ホ。亦

安穩る。皆。春。水。の。碎。を。く。浮。沈。を。共。ま。つ。る。是。併。浴。當。が。怨
 靈。只。その。金。は。宣。縁。て。祟。ま。り。の。お。る。べ。け。ま。も。あ。の。く。貪。婪。淫。慾。を。
 む。づ。ら。招。く。殃。危。あり。妖。の。徳。不。勝。を。ま。と。ま。と。浴。當。が。冤。魂。の。所。為。と
 の。と。ろ。の。違。へ。り。仁。人。義。士。忠。臣。孝。子。順。孫。貞。女。賢。妻。も。か。る。祟。あ。る。べ。い
 や。汝。出。て。汝。は。返。る。眞。罰。と。ん。を。か。さ。る。べ。か。て。又。偽。二。郎。の。朝。阿。磔。は
 い。や。某。蓮。華。院。は。寄。宿。と。あ。る。入。經。卷。繕。寫。の。為。あ。る。今。辞。せ。り。て
 こ。よ。在。る。バ。寺。僧。ホ。怪。ま。ん。下。の。比。寺。は。立。か。つ。て。よ。く。こ。ら。へ。今。宵。又
 潜。く。こ。よ。来。る。と。死。の。の。後。安。か。ま。さ。と。い。は。阿。磔。も。その。意。は。伴。て。
 竊。は。背。門。より。出。遣。けり。か。て。偽。二。郎。の。蓮。華。院。は。還。つ。つ。住。持。は

傍り告ていふや。某昨夕外は出て浪花ある友は逢へりその人則告て
 いへり。某が乾親へ共は是浪花人ありいぬ日より彼夫婦齊一病臥て
 命危し要時の暇をあらうて浪花へ来よといふとそれ乾親夫婦の
 るんは且身の暇をあらう。彼地より来たる年来の恩義は酬ふを以て
 寔はこゝろ幸あるんその病かこゝろかへり来るべしとて言葉巧は
 欺は住持に聞てうち領ま。つら寺の筆畀の尤大部の巻軸るんは性急は
 せよとよめば。さるもらの病人もな浪花のるんこそ火急の義あるや
 彼地へ赴きて看病果て又来ぬと快く許しつ。些の銭別を取せしむら。
 傳二郎は教び受て退きて衆僧は告今宵渡船は衆んとて。己が部屋の

物をと大くこまろ飲めて申の比及ま寺を辞し去り且く途は日を消し
 又彼宿所へ赴く程は阿磔の匙共侶も手つら。馬食を安排して今くと
 俟てぞり。背門より竊は音つら。聞果もせど迎入して。馳て便室は併ひ
 けり。是よりして傳二郎の阿磔と枕席を俱ふして。西三个月潜びしをり。
 まれも劇齋の病架の外は客を招くを親き友人あり。一は留守の家
 主人訪む。故は奸夫淫婦は匙を雁番して忌憚る日とあり夜とあり
 情慾を恣よせしを無慈悲也。

刀筆青砥石文鴛水鏡語卷之三終

